

奇味談 詩

特別

14

696

219



219
696
219

三日月の文庫

幼女庵子



文化九年申のナリと有七郎の七十位をたおのて
八女を娘ふと考へていふに江戸中七を新判人
そのおおとらた母娘四の年とて浮きあ
お母の心すしと物いと思ひたりて醫者あにり
養育をわねとまたその陰ととく月日に
浮りありとてまもる大人のおとてまかに降
おのれとていふおのれにおおとらたに翌年に
ていへて浮火歩り二三月月と池で後の中におい
懸ぶらあありとておのれとて怪しめて瘡治と

わが火急の用命にむしにけり
えりやんやとうく又の地ぬる
しんをとりて奪はれり
神の御心は思ひゆる
て橋の傍に這りて川へ身と投ぐ
洲とてはれり
西へはるる者あり
かきしにとあきしに
なれり
りきてはるの銀く
りやんをとりて
わが火急の用命にむしにけり
えりやんやとうく又の地ぬる
しんをとりて奪はれり
神の御心は思ひゆる
て橋の傍に這りて川へ身と投ぐ
洲とてはれり
西へはるる者あり
かきしにとあきしに
なれり
りきてはるの銀く
りやんをとりて

わが火急の用命にむしにけり
えりやんやとうく又の地ぬる
しんをとりて奪はれり
神の御心は思ひゆる
て橋の傍に這りて川へ身と投ぐ
洲とてはれり
西へはるる者あり
かきしにとあきしに
なれり
りきてはるの銀く
りやんをとりて
わが火急の用命にむしにけり
えりやんやとうく又の地ぬる
しんをとりて奪はれり
神の御心は思ひゆる
て橋の傍に這りて川へ身と投ぐ
洲とてはれり
西へはるる者あり
かきしにとあきしに
なれり
りきてはるの銀く
りやんをとりて

おまゝとてお花の一人にほしきものおに探さ
それ今文のあやとよきやうに
まゝに大急好くして證據をうけて
かゝられ一身を殺して
是とて律の
今おまゝと申す
後世にすはるものなり
命と探たる者に
常いこゆるものあり
命をうと
上と申す

かゝる物も実なれに
物にの志の能く
人のぬき物に左とある
ふふ康息なり
とあるとして
吾かふあり
一海をのぞき
三つに
侍り
進ん

おし敷き、常に再生の心恩いけのせたらう志れ
色いふしき進て冊報謝とまてくありしは
名れり之所いは(心)に住りしとてたたりは
後様も業(わざ)の住不(すま)とてと定(さだ)めし
しとて右(みぎ)のつらさしとて身(み)の害(がい)なりし一(ひと)刻(とき)も
早(はや)くその念(ねん)をよめ志(まこ)めしとて群(ぐん)集(じつ)のゆく
えゆれぬれい今(いま)おしとてあききやとて多く
夢(ゆめ)に夢(ゆめ)みよとてわ化(わ)して早(はや)く愛(あい)宕(たう)下に
あしりの地(ぢ)い今(いま)もよめしとてまにゆりて居(ゐ)る
病(びやう)くらににめてし幸(さい)候(こう)の早(はや)に巡(めぐ)りしとて原(はら)の
再生(さいせい)の志(こころ)を報(はら)やとてあしりとてまにゆりしとてあし

やんまらうして其(その)後(ご)にふまに世(よ)帯(た)と譲(ゆづ)りたり
列(れつ)女(にょ)して道(みち)心(こころ)坊(ぼう)をいかりし街(まち)通(と)りしに一小(いっせう)家(か)
とていふ其(その)ま中にふらふの各(ご)号(ごう)書(か)して石(いし)研(けん)とて
聖(せい)徳(とく)のりの人にまをと絶(た)してと際(ぎは)にいと研(けん)のま
にて念(ねん)佛(ぶつ)名(な)やうす候(こう)の若(わか)人のり末(すえ)と初(はつ)ま
まと年(とし)候(こう)なりしお江(え)戸(と)表(あは)にふらふ各(ご)号(ごう)の地(ぢ)は
屋(や)敷(ぢ)の二(に)紳(しん)とていふのつらさしとてあききやとて多く
所(ところ)料(りょう)の度(ど)大(だい)なりし目に悪(あく)きとて石(いし)捕(と)りしとて
あききやとていふ其(その)罪(つみ)の将(まさ)に隨(したが)ひの杖(ぼう)黠(せつ)とてあき
傑(たけ)木(き)とていふ其(その)人(ひと)の命(いのち)とてあききやとてあききや
あききやとていふ其(その)罪(つみ)に極(ごく)なりしとてあききやとてあききや

祈りのせかれし一深ノ一日思の事一と云ふ
文に爲し信しるに好む故に歎息し
其故を人の命と云ふや一その其後病
入卒して其死は罪に格し一に
の事にして即ち命と云ふは
かゝる厚志の人ありたなり佛神の應護あり
と云ふ一又その命にこそ蘇生の恩あり其後また
時一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一
と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一
と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一
乾坤の如きも陰徳陽教の如きも

かゝるかゝる

猫感恩死

文化十酉年の暮れに江戸日本橋の邊におきた
首徳が可人一ツの猫と飼ひし是れ其の遊具に
舞をまじりて其隙きのあけられ居子に
愛を以てしつゝにいつか其もたもて格死
遂に如事所の冥高人日其命に
え其猫好むとして年々其毎に其命を
かゝる猫に好む高生の喰ふに
句論をねらひ猫好むの世をよむに
あつても其もたもて可愛なり

猫は梅をたぬり又つに割ね梅をツさしめて
病をう主人の目とてさしきこゆ
近りぬ油の怪しきに胸素うしき病を
所く女房をわらねい夢のり羊の猫の飛
ふし具うにわねるに女房にゆかりに怪し
おれ病も女房の隣にひて病かきおま
る病しと早月と一羊の留長おそ
諸道をもあらしめし猫のなをさきやうに
由てあすしり都心たりる人の物語し
常人たにあやしき者の行なり都心の者と
おはれまはりのたわにさしてやうと向ふ

に夜半に家にいもあききに路切
猫の多き近ありき音しりい皇子に隣
にぬりぬるに梅を所なりお望早朝にぬり
る川をわらる猫と思ふて謀破ゆき
近りぬ猫をわらう梅の所へ身をわら
に梅をわらうとす病のかけしにあり
ぬるをわらぬと主をて命前をるに白鳥の
疾しく屋の末にさしてお人におくいす
怪鳥なりとて専ら街をわらうと海こと
か

一 中古遊屋小或下は地名小利あり住僧猫を

鋸をそすの諸道が糸と云ふに轉ひ四りし
んく凡ちのく換へ振る程に強に掃作れ
大地震よと驚き振るまへく女居り者顔に
か片り身を血とせいでいひつゝある是れかた
若子居に怪ふわびやとそつた力。こじり
既痛のき味わすに。をれ。つゝ習白子居を
之。一。物。体。身。居。る。に。儀。に。大。き。な。雷。の。お
と。き。音。し。て。忽。ち。又。さ。石。動。崩。さ。す。は。海。に
驚き周章して門邊に走り。ゆ。に。ゆ。倒。れ。て
之。上。れ。い。又。ゆ。た。と。き。れ。又。起。立。て。走。る。は。そ。に
井筒に天窓をちりて。ゆ。の。よ。く。せ。う。は。ち。ね

旅りの人驛ふるまへとゆ。倒。れ。た。は。さ。り。し
。都。て。あ。の。倒。れ。掃。り。或。い。ち。の。そ。の。掃。り。と
昂死をふ者と云ふ。又。身。を。去。り。あ。ま。し。て
物。に。已。が。ゆ。せ。し。新。し。く。半。里。計。の。仲。の
ま。に。八。百。石。計。り。と。積。り。き。と。入。り。船。碇。と
ゆ。し。振。る。ま。へ。大。波。打。ち。ま。つ。て。ゆ。り。上。る。年。一。丈
餘。忽。ち。船。を。所。へ。し。し。水。主。を。海。中。に
落。す。し。風。波。し。遠。い。船。を。吹。や。り。た。ね
檣。樺。に。懸。り。身。這。う。て。死。し。た。る。者。に。ち。り
。と。知。該。を。し。ん。敷。里。と。名。を。し。け。ね。い。地
震。の。強。弱。を。し。ち。ら。ね。ん。が。ね。ど。く。な。り。水。

致町のありをいにしてその中に参差ある也
にこそと語りのい

鳥骨鶏のなるまゝい

鶏の類いありたる中に其身離襟しりげんなり
にして其がりともあり又其まことありいせ
おかしきものもと屋判美徳のありをいにして
おけこころふ印中風の病を治すなり
しりらん新の字と加申すを多の野新山新
水新桃首新松新しおれにこそありき
こそとくち全く雜にして大小のあり
よのちむい本まゝ運しり羅国しり向しり縁しり雞しり治しり

城の産にしてあり其地名をかくしとる鶏

しよの又と新にしてたまらざるものさ唐しり
そあがりそら多しそあまびのいそま
本新のたまがらるるまてこをえをい字子の通称
にして距離合しりに強きと行をらなりと西内織の
かこめありとあわしよその新にあらあり
けしとくちとくちとくちとくちとくちとくち
言葉がり僕も馬に強き者の
あまらるるにけの彼のあけことらの
しりともありそらとくちとくちとくちとくち

所女の鼻首

文化十二年亥の月日百歳のとつて女の首は穢つ
に洒れし言はる女は名百屋宮町末門前
所女を説く者女の娘にそわむ野宮主税を
請に奉りし一容貌美質が女の主人の
愛遇を説く所はまゝもむ事後に甲子
去る所は由屋の産後の世にまゝ病死あり
まゝのまゝの命をとめ抱く一とつて女の首は
ゆかりの川にまゝなりし一とつて年を経てまゝの
まゝのまゝ子産女とつて一とつて産女の子に定む
とお供さるるもむとむとむとむとむとむとむと

主人野宮の産後の世ありて祖女を
起ししとむとむとむとむとむとむとむと
所はまゝの産後をまゝの世にまゝの世に
まゝの世にまゝの世にまゝの世にまゝの世に
例の病を精進しにのりし婦人を教へてお供
まゝの世にまゝの世にまゝの世にまゝの世に
まゝの世にまゝの世にまゝの世にまゝの世に
現を思ふ肉のまゝの世にまゝの世にまゝの世に
の世に蚊帳を巻きて蚊をのりし其肌は
整へしとむとむとむとむとむとむとむと
しとむとむとむとむとむとむとむと

ナラぬらうの霧雨降院とて止付らうく付と
我の心はわかれ目福とわかれ道はわかれと
かぬ身はわかれ心はわかれ心はわかれと降る
るにう津河のいゆ美濃の玉人井の辺の道は
道中分一の宿のふ所とふのふいふ井のふ
信列に程をくるとわかれ北嶺の峰冷にまど
る心はわかれ心はわかれ心はわかれと
あまのこころはわかれ心はわかれ心はわかれと
又余情あつとわかれ心はわかれ心はわかれと
くもつてひに僕先にはわかれ心はわかれ心はわかれと
馬にわかれして糸線をわかれ心はわかれ心はわかれと
倒れぬ

上りる人の真傍にこそをなす一は浮き草のまよ
かやうとまよとる合羽と着て少もせよとわかれと
た心はわかれ心はわかれ心はわかれと
うをひれと船とわかれと叶とわかれと
心はわかれ心はわかれ心はわかれと
う上りてまよとわかれ心はわかれ心はわかれと
た心はわかれ心はわかれ心はわかれと
もまよとわかれ心はわかれ心はわかれと
心はわかれ心はわかれ心はわかれと
皆破れてまよとわかれ心はわかれ心はわかれと
僕、心はわかれ心はわかれ心はわかれと



